

<成木の発展1 成木石灰①> 青梅の発展にも寄与した産業

成木今昔物語に度々石灰（いしばい）のことを掲載しているのは、成木地区しいては青梅の発展に大きな影響をあたえているためです。

江戸まで運ぶため、

① 成木地区の道路が整備された ②隧道（トンネル）が出来た ③青梅街道が出来た。

など、青梅だけではなく多摩地区全体の発展にも寄与しています。（明治時代には石灰石運搬のため青梅線の延伸にも影響を与えます）

1 石灰生産の始まり

武州多摩郡上成木村（現成木七丁目）と北小曾木村（現成木八丁目）の石灰生産は1590年（天正18年）に始まります。当時は『八王子石灰』と呼ばれていたそうです。※

石灰の生産技術の伝来と豊富な雑木のため、生産が始まり、1606年（慶長11年）の江戸城の天下普請の頃、江戸幕府の御用石灰となっていくます。

2 石灰の生産の実態

石灰作りは、もうかっていなかったようです。

慶安1年では、

1000 俵の売上 10 両

1000 俵の本金 28 両

赤字 18 両

と、作れば作るほど赤字になっていました。必要な物資であるため、幕府の庇護を受けるとともに、依頼主などから「拝借金」として援助があったようです。

年 代		生産 元	運上 (生産高・俵)	拝借金 (両)	価 格 1石あたり	
西暦	和暦				当時	現在価値※2
1606	慶長 11	3	—	—	143 文	6078 円
1632	寛永 9	3	—	250		
1648	慶安 1	10	—	250	2857 文	121423 円
1666	寛文 6	11	—	250	228 文	9690 円
1693	元禄 6	11	3000	250	834 文	35445 円
1694	元禄 7	21	3000	250	〃	〃
1697	元禄 10	21	3000	250	〃	〃
1698	元禄 11	18	3500	250	〃	〃
1699	元禄 12	21	4300	2500	〃	〃
1722	享保 7	13	7350	0	〃	〃
1799	寛政 11	6	1800	0	326 文	13878 円
1841	天保 12	6	1800	0	326 文	13878 円

3 石灰生産の変化

石灰作りも石灰焼成窯など、新しい製法の石灰が流通するようになります。特に牡蠣殻石灰

や野州・美濃・上州・常陸の安価で良質の石灰灰が江戸へ進出などにより、八王子石灰生産を困難にしてきたようです。幕府は幾度となく再興を図りましたが、窯数も徐々に減っていきました。その後はセメントの材料として石灰石を採掘し、輸送するという形に変わっていきました。

※ 八王子城の落城により北条氏の遺臣が伝えたとの記述があるのでもしかしたら八王子石灰と名付けられたのかもしれませんが。

【出典】青梅市史資料集第四十八号 都下村落行政の成立と展開 1998

青梅市ウェブサイト

【監修】若林 博司

注1:1石を慶安までは50リットル、寛文から63リットルとしています。

注2:1両=17万として考え「金1両=4000文としました。つまり1文=42.5円ということになります。